

**BBS の効果的な活用法の探求—オフラインの協働作業—**  
**EXPLORING THE EFFECTIVE ACTIVITIES WITH BBS:**  
**THE INCORPORATION OF OFFLINE PEER COLLABORATION**

北出慶子 立命館大学 Keiko Kitade, Ritsumeikan University

概要：非共時性でかつコンピュータ媒介のコミュニケーションである BBS は、第二言語学習において新たな学習環境を提供する。その特徴を第二言語習得理論、特に社会文化的アプローチの視点から考察し、BBS の特質を拡大利用・補足した学習活動を 2 つ提唱する。一つは、オンライン活動中のオフラインにおけるピア協働活動の奨励、もう一つはオンライン活動後のピア反省活動の提供である。メタ言語的視点での話し合いを促し、ピア間の協働活動を通じて知識を協働構築する機会を提供することを目的としている。これにより非共時性オンラインでは困難であった累進的で偶発的な補助の提供が可能となり、オンラインとオフライン両方の利点を持つ活動が可能となる。

キーワード：非共時性インターアクション、CMC (コンピュータ媒介コミュニケーション)、社会文化的アプローチ、協働作業、メタ言語エピソード

## 1. イントロ

BBS やメールなどの非共時性コンピュータ媒介コミュニケーション (ACMC) は、場所だけでなく時間的拘束が緩いことから、ネイティブを含む幅広い層の相手とのオーセンティックなコミュニケーションの機会を第二言語学習者に容易に供給することができる。しかし、ACMC は従来のインターアクションとは異なる性質を持っており、その性質が第二言語学習にどのような影響を及ぼすかを考慮した導入方法が必要である。この研究では、まず、ACMC がテキスト媒介インターアクションであり非共時性である、という 2 つの点を第二言語習得への可能性から社会文化的アプローチにおいて考察し、新たな ACMC の活用方法の提案とその探検的研究結果を述べることを目標とする。

## 2. 第二言語習得から見た非共時性インターアクションの特徴

### 2-1. テキスト媒介インターアクション (この研究ではテキスト媒介 CMC に重点をおく)

言語は高度なメンタル・プロセスを媒介するという Vygotsky(1978)の考え方では、テキストは「思考の道具 "Thinking device"」と見ることができる(Lotman, 1988)。Wells(1999)によると、テキスト媒介の作業(書き)は、テキストという媒介を通して学習者の考えを明確に表に出し、またその記録から考えを反省し、新しい考えを構築していくというプロセスを促すと考えられる。

また、テキスト媒介であるだけでなく、インターアクティブであるという点は、CMC を従来の書き作業とは異なる性質のものにしている。Warschauer(1997)は、テキスト媒介で相互

性のある CMC の特徴は、協働学習(collaborative learning)を促すと提唱している。インターネットチャットでのディスカッションタスクにおいて、Darhower(2002)と Kitade(2000)は、第二言語学習者間で、タスクの難易度や方向の調整、協働的な雰囲気作り、相互主観の構築、などの相互の足場作り(scaffolding)の提供という協働学習が確認されたと報告している。

## 2-2. 非共時性 (メッセージ間の時差)

上記のように、チャットのような共時性 CMC では、協働学習の促進が認められるが、非共時性 CMC においては、メッセージ間の時差があることから、足場作りの提供が難しいという点が指摘されている。Kitade(2006)と Stockwell(2004)は、日本語学習者と日本人学生との間でのメール交換学習において、意味の確認依頼や質問などの補助を求める行為が応答なしに終わるケースが多いと報告している。これは、話の内容が前後してしまい適確に逐一応答ができない、また、共時性でないことから返事をする事へのプレッシャーが弱いことに起因する。また、インターアクティブ性が低いことから、学習者の知識に合うように調整された応答をすることも難しい。従って非共時性 CMC では、協働学習に必要な、「累進的(graded)で偶発的(contingent)なフィードバック(Ajaafreh & Lantolf, 1994)」を提供することが困難だといえる。

一方で、メッセージ間に時間の余裕があるという点は、上記のテキスト媒介で述べたような反省プロセスの機会を増徴するという可能性を保持している。Lamy & Goodfellow(1999)は、このような特徴から、非共時性コンファレンスは、メタ言語およびメタ言語学習についての話し合いに適切だと述べている。

このような ACMC の特徴を考慮すると、メタ言語な反省プロセスを促進するという利点を保持しつつ、協働学習に必要な共時性でのフィードバックの欠如を補った ACMC 活用が必要となる。この点を考慮した BBS の第二言語学習における活用方法を以下に2つ提唱したい。

## 3. 新しい BBS 活用方法の提案

### 3-1. オフラインのピア協働作業

BBS 活動において、オンラインで母語話者と言語的にも社会的にも意味のあるコミュニケーションに従事しつつ、オフラインでメッセージの理解及び作成段階におけるピア対話をとりいれたケース・スタディを実施した。学習者(日本語・中上級から上級)は、同じクラスの学習者2名と日本人学生2名から成る計4名のグループにおいて BBS で意見交換を行った。BBS では、「理想の大学」や「理想の仕事」など各学期のテーマで意見を出し合い、最終的にグループで意見をまとめ、提出した。日本人学生とは BBS でのみコミュニケーションをとるが、同じグループの学習者2名は隣に座り、協働で日本人学生へのメッセージを書いた。この方法で、BBS のメッセージと学習者間の対話を録音、分析した結果、学習者はオンラインではなくオフラインにおいてメタ言語の話し合いを行っていることがわかった。また、話し合われた言語アイテムを6週間後の各学習者に調整されたポストテスト(e.g., Swain,

2000)で調べたところ、73.3%(80/132)の記憶の保持が確認された。

オフラインでの協働作業は、オンラインで母語話者と意思疎通を行うという意欲を保持しつつ、言語面で不安な点や知識の足りない部分をオフラインでのピアとの対話によって補い、さらに協働作業によって一人ではできなかったレベルへの到達を促すという可能性が示唆された。この方法は、読み書き作業を協働で話し合いながら行うという点で、Wells(1999)の提唱する「テキストについての話し合い “Talk about text”」に似た利点を提供している。オフラインで学習者はテキストを「思考の道具」として、お互いの知識の段階を明確にし、その地点から知識を(再)構築していくことができる。

### 3-2. 反省活動の導入

上記のようなピア活動を中心としたインターアクションにおいて指摘されているのは、学習者の目標言語知識の限界から、稀にはあるがピア対話においてノンネイティブ的な言語形にたどり着いてしまい、またそれを記憶してしまうという点である。そこで、最近のピアでの書き作業を取り入れた研究では、まずネイティブが学習者の作文を改良し、学習者はピアと改良文と原文を比べて異なる点を見出すという「リフォーメーション」の導入が提唱されている(Swain & Lapkin, 2002)。同じではないが似た方法として、2つ目のケース・スタディでは、BBS活動が全て終わった後で、学習者のBBSメッセージの中でノンネイティブ的な表現や形に下線を引いた印刷物をペアに配布し、下線部分についてのメタ言語的ペアの話し合いの場を提供した。3週間後のポストテストでは、75.4%(80/106)の記憶保持が見られた。

方法はリフォーメーションとは少し異なった活動ではあったが、インタビューで学習者はこのような反省活動の意義を次のように認めている。「BBSでは自分の間違いが分からなく、また相手の日本人学生も間違いを指摘しないので、正確な日本語の練習ができない。初めは、自分の書いた文を見て直すのは恥ずかしかったが、このような反省活動があることで、自分の間違いに気づき、ネイティブ的な日本語に直すことができ、間違いの繰り返しを防ぐことができる。」このように学習者の日本語の間違いを指摘した上で、ペアのメタ言語的会話を持つことは、テキストという記録を媒介とし、知識の再構築における協働作業の機会を提供する。

### 4. まとめと今後の課題

以上の2つのBBS活動は、どちらもオンラインだけではなく、共時性コンテキストにおいて、メタ言語な話し合いの機会を提供する意義を提唱している。オンラインでネイティブと意見交換をするという意義のあるインターアクションは学習意欲を倍増するが、さらに言語学習を促進するためには、ピア協働作業、及び振り返り活動の導入を検討する必要がある。また、今までは、BBSやメールは、クラス外での宿題として実施されることが多かったが、この研究では、オフライン、つまり共時性でのピアインターアクションの必要性から、BBS

活動を教室内活動として行うことの意義を再検討した。

今後の課題としては、ピア協働活動全般の課題であるが、ペアの相性によって効果が異なることから効果的なペアリング方法の探究、ピア活動作業の有効性を学習者にあらかじめ教示しておく必要性、などが挙げられる。最後に、この研究では、BBSをより効果的に第二言語学習に導入するための方法を2つ提示したが、今後、ただ便利という理由でCMCを導入するだけでなく、CMCの特徴を認識した上で、それを活かした教授方法とその効果の探究を期待したい。

#### 引用文献

- Aljaafreh, A., & Lantolf, J. P. (1994). Negative feedback as regulation and second language learning in the zone of proximal development. *Modern Language Journal*, 78, 465-487.
- Kitade, K. (2000). L2 learners' discourse and SLA theories in CMC: Collaborative interaction in internet chat. *Computer Assisted Language Learning*, 13, 143-166.
- Kitade, K. (2006). The negotiation model in asynchronous computer-mediated communication. *Computer Assisted Language Instruction Consortium (CALICO) journal*, 23(2), 319-348
- Lamy, M. & Goodfellow, R. (1999). "Reflective conversation" in the virtual language classroom. *Language Learning & Technology*, 2 (2), 43-61.
- Lotman, Y. M. (1988). Text within a text. *Soviet Psychology*, 26, 32-51.
- Stockwell, G. (2004). Communication breakdown in asynchronous computer-mediated communication (CMC). *Australian Language and Literacy Matters*, 1 (3), 7-10, 31.
- Swain, M. (2000). The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue. In J. Lantolf (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning* (pp. 97-114). Oxford, England: Oxford University Press.
- Swain, M. & Lapkin, S. (2002). Talking it through: Two French immersion learners' response to reformulation. *International Journal of Educational Research*, 37, 285-304.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Warschauer, M. (1997). Computer-mediated collaborative learning: Theory and practice. *Modern Language Journal*, 81(3), p. 470-481.
- Wells, G. (1999). *Dialogic inquiry: Toward a sociocultural practice and theory of education*. Cambridge: Cambridge University Press.